

おしゃべりな「食」

Paradise の「食」の表象にみる抑圧と解放

山口 沙瑛

はじめに

Toni Morrison の作品には育てる、狩る、作る、食るといった多彩な食が描かれており、直接は語られない登場人物たちのトラウマや作品が暗示する社会問題を読者に伝えてくれる。*Paradise* もその例外ではないが、その中でも摂食障害の描写は、他の作品にはあまりない特異な食の表現であろう。それにもかかわらず本作品の先行研究では、ほとんど触れられてこなかった。本作品の摂食障害は主に Pallas Truelove に見られる。身体の社会的規範、性的トラウマ、自己価値の喪失など、様々な要因が絡み合いながら、Pallas の拒食や過食は、彼女の心身を支配する。また Gigi の過度な食欲と Connie のアルコール依存症も常軌を逸した食行動であり、Pallas 同様に何か特定の価値観や記憶の束縛がその根幹にある。よって作品全体を通して、彼女たちの食行動の歪みから支配/被支配の関係を読み取ることができるだろう。さらに本論は、歪みの修復過程にも着目し、この二項対立を解体する可能性も探る。支配/被支配の関係は、物質主義や西洋文化など地球規模に広がった価値観と密接に結びついてきた。そのため、摂食障害を中心に食行動の歪みに注目することで、*Paradise* における「食べる」という行為を、個人という小さな領域を超え社会的・文化的な文脈の中でも見直すことができるだろう。

拒食

Pallas Truelove の拒食は、周囲との関係が要因となってその心身を支配し始める。Pallas は裕福な家庭で過ごす、家族や友人との関係は希薄であった。そうした孤独の中、学校の用務員 Carlos との交際は、彼女に幸福をもたらす一方、彼女は拒食へと陥っていく。痩せる前の Pallas の身体は、“butterball”に喩えられ、Carlos の存在が彼女の体重をバターのように溶かしていく。つまり彼女の身体は他者との関係性に支配され、形作られていくのである。

また他者に対する強い意識は、Pallas の高級志向だけでなく Carlos に対しても見られる。彼女は Carlos の人格よりも容姿に注目し、彼を競争的価値の高い商品として位置づける。また自分と同じ価値観で染めるかのように多くの物を彼へ贈ろうとする。しかし彼はほとんどそれらを受け取らないだけでなく、彼女の希望とは裏腹に、結婚前を理由に性的関係を深く進めようとはしない。つまり、Pallas は自身の肉体という贈り物までも Carlos に受け取ってもらえなかったのだ。また Carlos は Pallas の体重について意見することもない。だが、1970 年代の広告メディアによる痩せた身体の実理想化と Pallas の芸能関係者との近さを考慮すると、実際は Carlos の存在よりもスリムな体を理想とする価値観が彼女の頭の中を占めていたのだろう。痩せた身体が彼の愛情を維持する手段であるかのように、Pallas はそれを求め続ける。

このように Pallas の拒食は、精神的な孤独だけでなく、物質主義や社会的規範、競争心など複数の要因が相互に影響を及ぼし合いながら増長していくが、社会も含めこれらは全て彼女以外の他者の存在である。他者/個人の間にある支配/被支配の二項対立が彼女を拒食へと駆り立てるのだ。

嘔吐と支配

この二項対立は、より暴力的な形で Pallas の肉体に直接刻まれる。母の家を飛び出した後 Pallas は性的暴行にあい、そのトラウマから嘔吐や失声症に陥る。トラウマは黒い水のイメージで蘇り、それに抵抗するかのようには彼女は嘔吐を繰り返す。嘔吐は、彼女の身体に侵入し傷つける他者への抵抗を示す一方、必要な栄養までも拒絶し、肉体の健康は擦り減っていく。拒食と同様に、嘔吐も他者からの支配の影響を表しているのである。

Pallas の摂食障害と同様に、ワインは Connie の心身を支配し、嘔吐や食欲減退、抑うつ感などを引き起こす。ワインは孤独を一時的に和らげる一方、それ自体が西洋文化の支配を象徴すると同時に、一方的な西洋教育により社会的にも精神的にも不安定な Connie を依存症という形で支配しており、支配/被支配の二項対立と帝国主義や植民地支配との繋がりを読み取れる。従って、それと Pallas の共通点に着目することは、摂食障害の根本にある支配/被支配の二項対立も世界規模の視点から見直す可能性に繋がるだろう。

過食と逃避

修道院の環境と豊かな料理は Pallas の心身を一時的に癒すが、彼女の摂食障害は拒食から過食へと移行し、最終的に過食嘔吐の状態に至る。食べ物への執着から周囲の状況だけでなく、体の傷にもすぐに気づくことができず、性的暴行直後の様子と同様に、彼女の精神と肉体は分離したままである。また父のもとへ帰る直前には、痩せる意思を示すが、学校でも家でも孤独な彼女は一人豪華な食事でその孤独を埋めようとする。

さらに過食と同時に「吐く」ことも繰り返されている。体型を気にする彼女は、食べたものを全て吐いたにもかかわらず体重が増える状態については気にするが、「吐く」という行為自体には何ら疑問を抱いておらず、それが悪阻の症状であることに気づいていない。結果、嘔吐によって、Pallas は体重増加という自然な肉体の現象だけでなく、妊娠という現実からも逃避することとなる。過食による逃避は Gigi にも見られる。公民権運動で目にした残酷な光景は彼女に死や暴力に対するトラウマを植え付けた。目の前のものをひたすら口に詰め込む無機質な食べ方には、その恐怖を抑える様子が見取れる。

「食べる」ことは心身の癒しにつながる一方、Pallas と Gigi の場合、過去の傷や目の前の問題からの一時的な逃避とも捉えられる。だが、孤独で不安定な状況下では、例え歪んだ形であっても「食べる」という行為に縋るしかない。食べる/食べられるという関係において、「食べる」ことは心身の癒しとなる一方、過食は「食べる」という行為/それに依存する者という別の関係を生み、そこにも支配/被支配の二項対立が見えてくるのである。

二項対立の解体

彼女たちの食行動はこうした問題を抱えたままでは終わらない。物語後半で Connie の調理過程の詳細な描写と呼応するように、各々が抱える問題も明らかとなり、完成した料理を前に始まる儀式によって失った心身の主権を取り戻していく。その証拠に儀式の中で Pallas は妊娠した肉体を受け入れる。また彼女の赤ん坊のふくよかな手足の描写から、彼女の摂食障害にも回復の可能性を読み取ることができるだろう。

しかし、実際その回復の可能性は、「食べる」という行為そのものよりも Connie の儀式以降の描写から読み取れる。物語の幕引きで聖母マリアの悲しみを表す *Piedade* が描かれているように、彼女は西洋文化の要素を一部保持しつつ、新たな宗教観を築き、女性たちをトラウマからの解放へと導く。また Connie が自らを縛っていた西洋文化を切り捨てなかったように、Pallas も摂食障害の要因の一つである物へのこだわりを完全には排除していない。自分たちを支配してきた価値観をも受け入れることが、支配/被支配という対立関係を揺るがし、それが生み出した食の歪みの修復に繋がる。本作品の摂食障害の描写は、あらゆる価値観が孕む支配/被支配という二項対立の問題を浮き彫りにすると同時に、その解体の可能性も示すのだ。

結論

以上のように本論は、*Paradise* における摂食障害をはじめとした様々な食行動の歪みに着目することで、その根底にある支配/被支配の関係を読み取った。「食べる」という行為は癒しへと繋がる一方、過去のトラウマや人間関係といった個人の問題だけでなく身体的規範、物質的な競争など社会全体に見られる歪みとも入り混ざり異様な形で、心身を支配する。だがそうした歪みの要因をも受け入れることで、その支配から解放される可能性も読み取ることができる。*Paradise* における歪んだ食行動は、「食べる」という行為それ自体の再解釈だけでなく、物語の結末にあらゆる二項対立のどちら側にも納まることのない広い視点を読者にもたらしてくれるのだ。